

近藤克則 著

研究の育て方—ゴールとプロセスの「見える化」

二木 立（日本福祉大学相談役・名誉教授）

本書は『総合リハビリテーション』2016～2017年に長期連載されて好評を博した「研究入門」を一書にまとめたものです。リハビリテーション医療の臨床研究から「健康の社会的決定要因」を中心とする社会疫学へと研究のウィングを広げつつ、現在も第一線で研究を続けている近藤氏が、自己の研究をいかに育ててきたか、大学院生や若い研究者をいかに育ててきたかを、系統的かつ具体的に紹介しています。

全体は以下の4部（24章）構成です。第1部「総論」、第2部「構想・デザイン・計画立案」、第3部「研究の実施・論文執筆・発表」、第4部「研究に関わるQ&A」。各章の最後には、近藤氏オリジナルのさまざまな「チェックリスト」が付けられており、頭の整理に役立ちます。

第1部で一番強調されていることは、良い研究には意義・新規性・実現可能性の3条件があることです。これらは初学者が「お勉強のまとめ」的論文を書くことで自己満足しないために、常に意識すべきことです。第2部の中心は第5章「研究テーマの育て方」です。ここで私が一番重要と感じたのは、「研究テーマを考えるとき」に「先輩や指導者に相談すること」です。このことは、本書全体で何度も強調されています。先行研究の「レビューすべき3つ

のこと」（81頁）も、良い研究をするうえで不可欠だと思います。第2部で一番実用性が高いのは第11章「採択される研究助成申請書の書き方」で、近藤氏の豊富な審査委員としての経験に基づいて、ポイントが簡潔に示されています。

第3部で類書にあまり書かれていないのは第15章「期待した結果が得られないとき」で、それへの対策が簡潔に書かれています。第4部は『総合リハビリテーション』連載に寄せられた質問に対する回答で、特に第22章「研究を学べる場の条件」は、研究（者）を目ざしている方必読です。ただし、最後の「大学院の勧め」では、現在は働きながら学べる夜間制大学院や通信制大学院が多数あることにも触れていたかったかと思う。

最後に初学者が本書を読む際の留意点を一つ述べます。それは、本文だけでなく、本書に含まれている多数の図や表をていねいに読むことです。著者は「ページ数が増えて通読が困難となる」ことを避けるため、盛りだくさんの内容を200頁強にコンパクトにまとめたため、重要な図表の説明をほとんど省略しているからです。

（A5判 頁272 定価2500円＋税[ISBN978-4-260-03674-0] 医学書院刊）